

《授業と子ども》

ひらがなの授業(9)

―ねじれた音も二つの文字でかく―

千葉 建夫

もう一つの新しい音

拗音も一音節で発音して、ひらがな二文字で書き表す仲間に入る。

拗音の学習の前に五十音図を子どもたちと一緒にながめながら、これまで学んできた音節についてまとめた。

まず、音節にはすんだ音(清音)ㇿ字、これに対立するにごった音(濁音)がㇿ字あった。それに「ん」と「を」を加えてㇿ字がひらがな文字のすべてになる。

日本語の音節はそのうえにつまる音(促音)ㇿ音、長音(長い音)ㇿ音があつた。これらの音節は一文字で書き表すひらがな文字がないので、清音・濁音のㇿ字の中から二字を組み合わせて書き表すようになっていく。

ここまで学んできたことを土台に、もう一つの新しい音、拗音を学ぶことになる。

「キ」と「キャ」はちがう音

最初の授業は拗音を意識させることから始めた。

「これは、何の花ですか？」(図①)

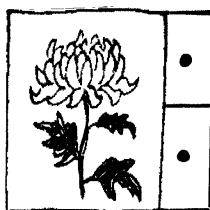
「きくの花です」

「『こんにちは』とおばさんがたずねてきましたよ。このときのおばさんをなんといいいますか？」(図②)

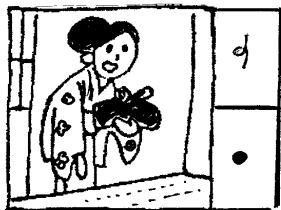
「おきやくさんがきたという」

「そうだね。このときのおばさんを、ていねいなことばで『おきやくさん』といいますね。ふつうの言い方は『きやく』といいます。この花は『キク』

図①



図②



です。おばさんは『キヤク』といいます。もう一度、発音してみましよう」

最初に目をとじさせ、耳で二つの音の違いを聞き分けられるようにし、それから絵を指して、子どもたち一人ひとりに、「キ」と「キャ」の区別がはっきりつくように発音させた。

「キクはいくつの音ですか？」

「二つの音です」

「キヤクはいくつのおとですか？」

「これも二つの音です」

「『キャ』が一拍ということはずぐわかったようだ。

『キ』と『キヤ』は同じ音かな？」

「ちがう音だよ」



『キヤ』という音はこれまで出てきた音にあったかな？」

と聞いて、五十音図を広げて探してみたが、なかった。

「この音はね。まだ勉強していない新しい音なんです。こ

れは、ねじれた音というのですよ」

と最初に音の名前を教えた。それから、「客」の絵のわきに

と記号を書いて、その記号  を「キヤ」と発音

させた。

「キヤ」のつく単語をさがす

次に「では、この『キヤ』の音のついた単語にどんなものがあるか探してみよう」とよびかけた。

「キヤベツ。キャンブ、キヤラメル。きやくほん、キヤタ

ピラ キヤプテン、キヤラバン、キャンドル キヤンデ

ー、ギヤング、キャンキャン・・・。」

このほかにも、「ネコは英語でキャットというんだよ」

「お金のことをキヤッシュというでしょう」「こわいときは

キヤーというよ」というように「キヤツ」「キヤー」という

音も出てきたが、「キヤ」の音を比べてみたら少しちがうよ

うだと気がついた。それで、「これは、あとで勉強するから

ね」といってこの「キヤ」のつく単語からはずしておいた。

「キヤ」の音のうまれかた

ところでこの拗音の「キヤ」という音節はどんな音なのだろうか。

五十音図にまとめられた音節の多くは「子音+母音」という形で発音されるが、ヤ行に属する「や」「ゆ」「よ」とワ行に属する「わ」の4つの音節だけは違っている。これは、「半母音+母音」という特殊な形で発音される。

半母音というのは、どんな音かという

と、最初に母音

iの口のかまえ

をしておいて、そ

こからつづけて母

音 a、u、o を発

音してみよう。す

ると、や (ya)、

ゆ (yu)、よ (y

o) のヤ行の音節

が生まれる。(図


③) 次に、母音

uの口のかまえを

してつづけて母音

aを発音してみよ

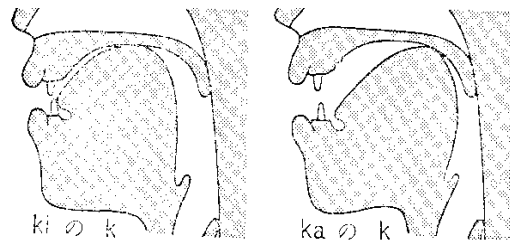


③  母音 i の口の か
まえから つづけて 母
音 a、u、o を 発音すると、
ヤ行の 音節に なります。

a	i	u	e	o
ya	—	yu	—	yo
(ヤ)		(ユ)		(ヨ)

y は 母音 i と おなじ ような 音ですが、 いつも 母音 a、u、o の まえに ついて いて、 子音と おなじ ように つかわれます。

「にっぽんご5」(発音とローマ字)より



「かな文字の教え方」より

図④

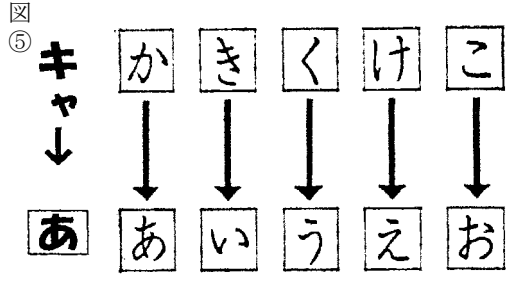
ちがつて、前舌がうわあごにむかって高くもちあげられていることがわかるだろう。(図④)このような現象を子音のうわあご音化と名づけられ、この現象を「k y」「s y」などで表すことができる。このような子音のうわあご音化はイ段の音にだけおきる現象で、この「k y」「s y」などの舌の位置で、a、u、oの母音をつづけると、k y a (キヤ) s y a (シヤ) のような拗音(ねじれた音)ができるという仕組みなのだ。ローマ字では拗音を k y a (キヤ) s y a (シヤ) t y a (チャ) のように表記していて、発音現象がよくもわかるようになっていいる。拗音のひらがなの表記もイ段のかな文字「き」「し」「ち」を使って表すのも

この発音上の共通性に基いているといえる。以上のような拗音の音声学的なしくみを一通り理解しておく、拗音の授業展開が具体的になってくる。

まっすぐな音とねじれた音

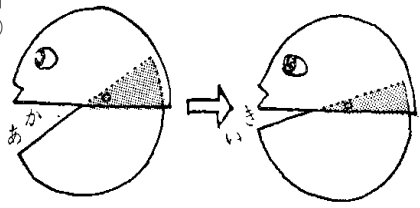
「キヤ」の音がなぜねじれた音というのかを子どもたちと考えた。「かな文字の教え方」(須田清著)の拗音の授業の展開に学んで次のように進めた。

はじめに「『キヤ』はどの段になりますか。」と聞いた。「キヤー、キヤーア」ア段であることはすぐわかった。次に下の図のようなカードを展示して、まず、「か」「き」「く」「け」「こ」のそれぞれの音は自分が属する段の母音にまっすぐに進んでいくことを確かめておいた。(図⑤)



図⑤

次に中心をハトメでとめた人形をだした。(図⑥)「この人形のまねをして、みんなも声をだしましょう」といって、「かーあ」と口を大きく開いて発音させた。「かーあ」と開いたままの口のかまえから、こんどは「きーい」



「かな文字の教え方」より

にうつった。

「『か』と『き』の口のかたちはおなじですか？」

「『き』は、くちびるがせまくなるよ」

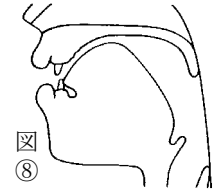
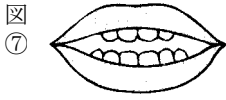
「『き』は、口がよこにひらいているようだ」(図⑦)

「『か』と『き』の口のひらきかたが違いますね。それだけでなく実は、舌の動きもちがっているのですよ。これは、『き』というときの舌のかたちです」

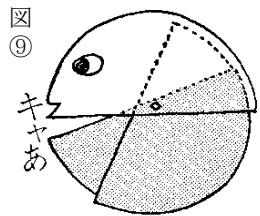
そういつて、『き』の口形図(図⑧)を見せ、口がせばまると同時にまえ舌が上の歯ぐきに向かってもち上がることを確かめた。

「今度は『き』の口のかまえをしてごらん。口のかまえというのは『き』というときの口と舌のかたちにするんだよ。それから『き』とはいわないでね。声をとめてがまんして、それからきゆうに『あ』といつてごらん」

モデル人形の口のかまえに合わせて、「き」



の口かまえからきゆうに口をひらいて、「あ」と発音させた。すると、「キャ」という音がでた。(図⑨)子どもたちは、モデル人形に合わせて、何回も「き」(口がまえ) ↓ 「あ」を



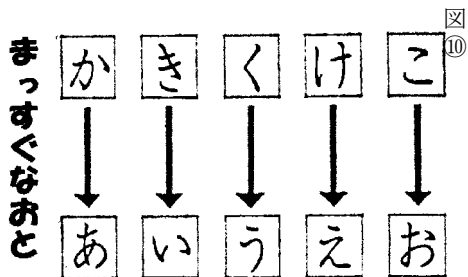
図⑨
キャあ

くりかえし、「キャ、キャ」といいながら、「キャ」の音が生まれるしくみを確かめては楽しんでいた。

そのあとに、もう一度前の図にもどった。(図⑩)

「『か』のおかあさんは ↓ 『あ』です。『き』のおかあさんは ↓ 『い』ですね。このように音を長くのばして発音したとき、おかあさんの音にまっすぐにすすんでいく音を『まっすぐな音(直音)』といいます。今までにならったすんだ音もにごった音もみんなまっすぐな音ですね。ところが、この「キャ」という音はね。『き』から出発して、まっすぐに『い』にいかないでどこに行くと思えますか？」

そういつて、図⑩のような矢じるしを、ぱつと反転させて、「あ」のほうにねじった。すると、「あっ、『キャ』だ。」「そうか。わかった。だから、ねじれた音というんだね」という子ども



「き」(口がまえ) ↓ 「あ」を

たちの声がした。こうして「ねじれた音」のでき方をつかむことができた。

つぎに反転した矢印を指し示して

『き』の口がまえから、『あ』のおかあさんの方向にいくときに、『キ』でもない、『ア』でもない音ができるでしょう。その音はなんだろうね？」

と聞いた。子どもたちは「キヤ、キヤ」と何度もいつていたが、やがて、

『ヤ』が聞こえるよ。小さく『ヤ』の音だよ」

という声が出た。「ヤ」の音が入るのを発見できれば、あとは子どもたちの発見を整理してやればいい。

『キヤ』という音は、さいしよに『き』の口かまえをしていて、『あ』のおかあさんの音のほうにねじれますね。そのとき、かすかに『や』という音が聞こえます。それで、『キヤ』というひとつの音は、ひらがなのふたつの字でかくことにしています。最初は『き』の字、2番目が『や』の字、『や』の字は小さく書くことにしますね」と説明をした。そし

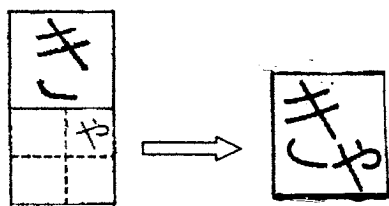


図 12

ます。それで、『キヤ』というひとつの音は、ひらがなのふたつの字でかくことにしています。最初は『き』の字、2番目が『や』の字、『や』の字は小さく書くことにしますね」と説明をした。そし

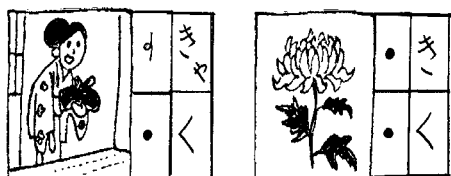


図 13

て二つの文字を一マスにおさめて、「きや」と書いた。(図 12) 最初に提示した「キヤク」の絵カードにも「きやく」と書きいれた。(図 13)

それを見て、「先生、つまる音の書き方とにているね」と気がつく子もいた。こうして「キヤ」の音をひらがなで書く書き方がわかったので、前に「キヤ」のつく単語さがしで見つけた絵カードをならべて、ひらがな文字で正しく書き表す練習をした。(図 14)

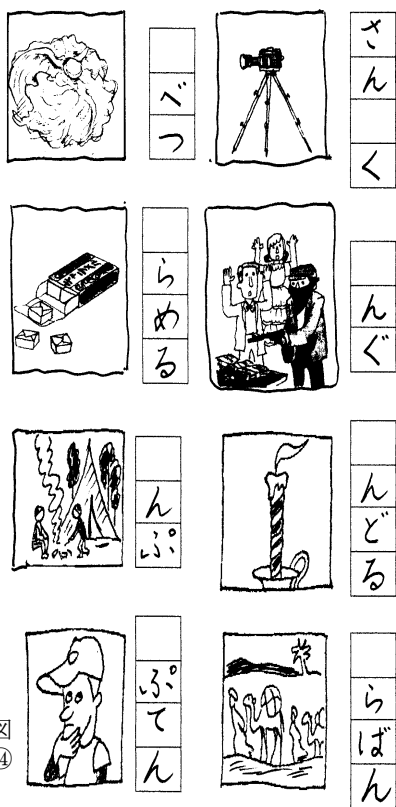


図 14

か行のねじれた音

次にカ行のねじれた音をまとめた。

『キヤ』の音は、『き』の口のかまえをして、息をとめていきおいよく『あ』といいましたね。今度は、『き』の口のかまえをして、いきおいよく『う』といったら、ど

んな音がでますか？」

子どもたちは「き」の口のかまえをし、勢いよく「う」といった。

「キュ、キュ、キュだ。キュがうまれたよ」(図15)

「今度は、『き』の口のかまえをして、いきおいよく『お』といったら、どんな音がでますか？」

「キョ、キョ、キョがうまれた」(図15)

「せんせい、おもしろいね。『き』が『い』のおかあさんへいかないで、ねじれるから、キュやキョがうまれるんだね」

そういつて、子どもたちは、「キュ、キョ」の発見をおもしろがった。そのあと「キヤ」と同じように、ねじれたときの小さな「ゆ」や「よ」の音を見つけ出し、「きゅ」「きよ」と表記することを確かめた。力行に対応するガ行にも

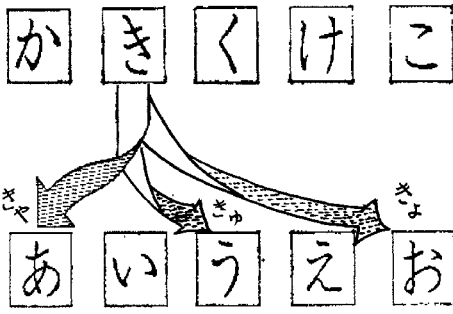


図15

「ぎや」「ぎゅ」「ぎよ」というねじれた音があることもすぐ理解できた。力行とガ行の「まっすぐな音」と「ねじれた音」の関係を図のように整理した。(図16)

ここまで学んだことを応用すると、サ行からヤ行まで、同じように直音に対して拗音があること、その拗音はイ段の音がねじれてつくられること、表記もイ段の文字の下に小さな文字に「や」「ゆ」「よ」

ねじれたあと	まっすぐなあと	ねじれたあと	まっすぐなあと
ギ や	が	キ や	か
	ギ		キ
ギ ゆ	ぐ	キ ゆ	く
	げ		け
ギ よ	ご	キ よ	こ

を書き表すことについてもわかってくる。

図16

導入の問題点について

なお、導入の段階で「1年生の「ごんご下」の「ねじれた音」の導入は、「さんかく」と「さんきやく」、「せんす」と「せんしゅ」との対比であつかつている。まっすぐな音とねじれた音との対応は「き」と「きや」ではなく、「か」と「きや」であることを考えれば当然そうなると思われる。

私の実践は「にっぽんご1」(「もじのほん」)の段階での展開になつているので、「か」と「きや」との対比で入る授業展開については、「教育国語4-6」(むぎ書房)の「1年生に日本語を教える教師のために」(菅原厚子さんの報告)が参考になる。現場の研究も実践もたえず進んでいる。他の実践にも学んで、子どもたちのために、よりよい実践

を作り出してほしいと思っている。